

運輸新聞

E-mail inquiry@unyu.co.jp URL http://www.unyu.co.jp

発行所・運輸新聞株式会社
東京都荒川区西日暮里3-6-10
佐々木ビル3F 〒116-0013
TEL03-5685-0035
関西支社 大阪市中央区瓦町1-3-2
〒541-0048 TEL06-6209-3261
発行人・野田裕之
火・金発行(祝日を除く)
3,600円/月(送料・税込)

2021年
12月10日(金)
第17450号

http://www.e-sohko.com



倉庫のならイ
イーソーコ株式会社
TEL.03-5439-9401

国土交通省環境行動計画案 次世代車に幅広い選択肢

国土交通省環境行動計画の改定を議論する社会資本整備・交通政策審議会環境部会は7日、2030年度を計画期間とする改定案を提出、審議した。年内に改定する。次世代商用車はEV、FCV、合成燃料など幅広い選択肢を示す一方、普及には水素スタンドなどインフラの充実についてさらに突っ込んで検討すべきなどの意見が出された。

新たな環境行動計画の目標年次は2030年度実績は8%減にとどまっておろ、「容易なものでない」との認識で一致している。

国土交通省は、7月に

国土交通省環境行動計画案(主な施策)

次世代商用車の普及促進、燃費性能の向上	
目標	8t以下 30年までにEV20~30% 40年までにEVと合成燃料を合わせて100%に 8t超 20年代に5000台先行導入 30年までに40年の普及目標設定
<ul style="list-style-type: none"> ○車載用蓄電池の国内生産基盤確立 ○燃費規制を活用し、あらゆる技術を組み合わせる ○EV車に対する高速道路利用時インセンティブ付与 ○合成燃料技術開発・水素インフラ充実 	
持続可能な交通・物流サービスの展開	
目標	アポイド・シフト・インフラ対策強化
<ul style="list-style-type: none"> ○自動運転技術を活用した物流ネットワーク強化 ○気候変動リスクに対応した物流システム強靱化 ○ETC2.0を活用した渋滞ボトルネック対策 ○交通需要調整のための料金施策 ○三大都市圏環状道路の重点整備 	
グリーン物流の推進	
<ul style="list-style-type: none"> ○サプライチェーン全体の輸送効率化・省エネ化 物流DXを通じたトラック積載効率向上/輸送ルート最適化/需給マッチング ○物流MaaSによるコネクテッド化、共同輸配送 ○荷主と物流事業者の省エネを評価する検討 ○高速道路での自動運転・隊列走行の検討推進 ○ダブル連結トラックの普及 ○ETC2.0を活用した運行管理支援 ○物流施設の脱炭素化 無人化機器・太陽光発電設備導入支援/冷蔵・冷凍倉庫の自然冷媒機器転換/予約受付システム導入により待機時間を削減した物流施設への輸送網集約化 ○過疎地ドローン、自動配送ロボットのサービス化 ○モーダルシフトの推進 ブロックトレイン・定温貨物列車の機材充実/貨物駅での新技術導入/コンテナホーム拡張 	
船舶・鉄道/航空の脱炭素化	
<ul style="list-style-type: none"> ○CNポート形成計画策定マニュアル(年内策定) ○内航海運CN化ロードマップ(21年中策定) ○国際海運のガス燃料船技術開発・実証 ○燃料電池鉄道車両の開発 ○駅での総合水素ステーション設置 ○電動化・軽量化。水素航空機の基準策定 ○持続可能な航空燃料(SAF)の導入促進 	

CN=カーボンニュートラル

の環境行動計画はそれらを踏まえてグリーンチャレンジを追加する。85項目のKPIを設定した。

物流分野は、次世代商用車の普及促進、持続可能な交通・物流サービスの展開、グリーン物流の推進などで構成される(表参照)。

次世代商用車は、ディ

ーゼル車からの転換を加速することが不可欠と、車載用蓄電池の国内生産基盤確保、CO₂と水素の合成燃料(e-fuel)の技術開発・実証、水素インフラの充実による内燃機関の脱炭素化を推進するのに加え、安価な再生エネの安定供給を含めた費用の低減や利便性向上を図る必要がある。

EVやFCV(燃料電池)、合成燃料など幅広い選択肢を設けたのは、エネルギー供給に不確実性があるため。

持続可能な交通・物流サービスの展開は、自動車単体対策のみならず、アポイド(渋滞など)を必要とする削減、シフト(排出原単位の小

交通需要調整のための料金施策が含まれており、委員から「燃費性能の高い営業用トラックの高速道路料金割引率引き下げを施策として出すべき」との意見があった。

グリーン物流の推進は、トラックからのCO₂排出量はわが国全体の約7%(営業用・自家用)の意見が出された。

計)を占めていることを踏まえ、物流DXの推進を通じた関係者の連携によるサプライチェーン全体の輸送効率化が必要だとされている。

環境行動計画案に対し、委員からは「どう実現するかが課題。進捗の確認と見直しは必要」との意見が出された。

い輸送手段への転換、インフラ(デジタル)技術の革新、新技術を活用した新たなサービスの創出の複合的な対策の強化の必要性を示した。

施策には

宅配便9・8%増
DM便4・1%減

ヤマト運輸
11月の小口貨物
ヤマト運輸の11月の小口貨物取扱実績は、宅配便合計1億9494万3990個(前年同月比9・8%増)、クロネコDM便7261万6932冊(同4・1%減)、合計で2億6756万922個(同5・6%増)だった。

宅配便の内訳は、宅急便・宅急便コンパクト・EAY1億6319万5902個(同8・2%増)、ネコポス3174万8088個(同18・3%増)。これにより今年度の累計(21年4~11月)は宅配便合計14億779万7146個(前年同月比9・8%増)、うち宅急便・宅急便コンパクト・EAY12億22531万1557個(同4・9%増)、ネコポス2億5048万5589個(同43・1%増)、クロネコDM便5億6001万8756冊(同1・5%増)、合計で20億3281万5902個(同7・4%増)となった。

全ト協 5つの場面周知を 感染予防対策ガイド第3版

全日本トラック協会は、新型コロナウイルス感染予防対策を効果的に推進するための内容を追加し、「トラックにおける新型コロナウイルス感染予防対策ガイドライン」(第3版)を策定。併せて、予防対策を着実に実行するためのチェックリストを作成した。

変異株の拡大も踏まえ、接触感染・飛沫感染およびマイクロ飛沫感染(微細な飛沫が換気の悪い空間を漂い、少し離れた距離や長い時間において感染する)の経路に応じた感染防止策を講じることをし、特に感染リスクが高まる「5つの場面」に応じて対策を従業員に周知することを求めている。

5つの場面とは、①飲食を伴う懇親会などは大きな声になる、注意力が低下するなど感染リスクが高まるため、開催は慎む、②大人数(5人以上)や長時間に及ぶ飲食は、感染リスクが高まる

ため、やむを得ず行う場合は少人数(4人以下)、短時間とする、③マスクなしでの会話は、飛沫感染やマイクロ飛沫のリスクが高まるため、口と鼻の全体を覆い顔の横などの隙間を塞ぐ、④狭い空間での共同生活は、従業員の距離確保、定期的な換気、仕切り設置、マスク徹底などにより密にならないようにする、⑤休憩時間など居場所が切り替わる際は、気の緩みや環境の変化により感染リ

スクが高まることを挙げた。

チェックリストは、一般的な項目に5つの場面のリスク周知、および従業員から申し出を受けた場合は抗原簡易キットを使用した検査を行うこととしたほか、事業所での勤務、休憩スペース、トイレ、車両・設備、点呼、運行の際に注意することを示した。

ら、新規に信用格付を取った。

同社の事業内容および財務状況について第三者機関から客観的な評価を

得ることで、経営の透明性を図り対外的な信用力を高めること、また、今後の資金調達手段の多様化および財務の安定性向上を図ることを目的としている。

格付の内容は次の通り。

【R&I】▽格付対象:
A A▽見通し:同

側認められたものの、今般同社から改善措置の申し出がなされたため、それを確認の上で審査を終了することを決めた。

改善措置の内容は、ライン参加・不参加は出店事業者の意思を尊重し、独禁法に違反する行為は行わない、不利な取り扱いや示唆を行わない、参加を余儀なくされた出店者が不参加申請する制約はしない。

楽天は、この方針に違反する動きを行った

不利な取扱いしない 楽天が改善措置

送料込み
ライン

楽天グループは、「共通の送料込みライン」を出店者に一律に導入する方針を転換し、公正取引委員会に改善措置を申し出たため、公取委は審査の終了を決定した。

楽天は、運営するオンラインモール「楽天市場」に出店している事業者に対し2020年3月、3980円以上の商品に対して

【R&I】▽格付対象:
A A▽見通し:同

発行体格付▽格付:A A▽見通し:安定的

長期発行体格付▽格付:
A A▽見通し:同

127万4000個(同0・5%減)、合計で3億6789万個(同2・2%減)だった。

これにより21年度の累計(4~10月)は、ゆうパック5億6802万個(前年同期比12・6%減)、うちゆうパケット2億4620万8000個(同21・3%減)、ゆうメール18億7368万4000個(同2・3%増)、合計で24億4170万3000個(同1・6%減)となった。

新規に信用格付を取得

J R貨物、12月3日付で格付投資情報センター(R&I)および日本格付研究所(JCR)から

Y T(21・12・10)



普段プロ野球にあまり関心はないが、今年の日本シリーズのヤクルト/オリックス戦は見てみたいと思った。何故なら昨年共にリーグ最下位で今年は優勝の下馬評にさえあがっていないかったチームで、偏に監督力の戦いではないかと思っただけだ。オリックスは12球団最低の平均年俸額でトップの球団とは半分以上、選手の素質を見出し鍛えて一流選手を揃えたチームと互角に戦える集団にもって来た中島監督。ヤクルトも平均年俸も高い方ではなく野村I D野球の流れを汲む苦肉人の高津監督。両監督とも選手達との相互信頼関係が生み出したチームワークで手に汗握る熱戦を繰り広げてくれた。両チームとも良い投手を揃えており、投手交代のタイミングと次に誰を持ってくるかの読みの勝負となった。試合は1点、2点の取り合いで逆点劇もあり、一球、一球に目が離せなかった。高校野球を見るような試合展開で正に筋書きのないドラマを満喫できた。勝負はヤクルトが勝ったが、どちらも優秀な投手揃えのチームであることを見つけた。監督の為せる技であろう。◆日ハム新庄監督も今年の日本シリーズのような僅差で競り勝ち野球を目指すと言え、来年のプロ野球は面白いかもしれない。